

● シリーズ 私の見た日本 Vol.199

日々変わりつつある日本の都市

Dadang Hartabela (ダダン ハルタベラ)

1988年インドネシア生まれ。2013年インドネシア・イスラム大学建築学科卒業。2017年バンドン工科大学大学院修了。修了後2017年よりバンドル・ランブ大学の建築学科の講師を務める。現在、北九州市立大学大学院環境工学研究科博士後期課程Dewancker Bart研究室に在籍し、屋外公共空間における熱的快適性の研究を行っている。



海外に住むことは私の最大の夢の一つであった。日本は私にとってそんな夢の始まりの国で、日本に来て約2年半の月日が経とうとしている。初めて日本に来たのは2016年の冬で、当時は6カ月間の交換留学生として福岡県北九州市にやってきた。日本での短期留学を終えたあと、母国であるインドネシアのバンドル・ランブ大学の建築学科の講師として数年務めていたが、2019年再び北九州の地に戻ってきた。博士号を取得するためであった。

私は二度の日本滞在を経験しているが、この二つの経験には大きな違いがある。一回目の滞在では一人であったが、二回目の滞在では妻と二人の子どもと一緒にということである。日本での生活は私と私の家族の人生にとって極めてかけがえのない経験になっている。これから二度の滞在によって感じた日本のまちづくりの発展性と建築のアイデンティティについて述べていきたいと思う。

開発の歩みを止めない

当たり前なことではあるが日本は昔から先

進国としてリードしてきた。テレビやSNSが発信している東京や大阪、京都など日本を代表する都市のイメージから、多くの日本を訪れたことのない人にとっては日本の都市がとも発展していると想像するだろう。実際にとっても造形的に面白い建築もあれば持続可能性にフォーカスした環境技術が際立つ建築もある。しかしそのすぐそばで案外土木工事やインフラ整備、リノベーションなど都市が常にアップデートされ、まさに古いものにかわり新しいものが徐々に入れ代わる新陳代謝が行われていることにとても驚いた。

中でも私が今生活している北九州では、JR折尾駅の改修が行われている最中である。日本初の立体交差駅であった折尾駅は時代と共に駅構造が複雑化していったことや、周辺環境との兼ね合いもあり2000年代に入り改修工事が計画され、10年以上の歳月をかけて工事が現在もおこなわれている。2016年冬、私が初めて北九州に来た時にもうすでに工事は始まっていたが今もお着々と工事は進み、2024年にその全貌が明らかになる。

私が日本の建築業界そして社会全体に対し

て関心したことは長期的な計画を行い、それを実行するシステムが綿密に構築されているという点である。なぜならば私の母国インドネシアではこのような長期的なプロジェクトは途中で頓挫する可能性が高いからである。時として、都市の開発が政治的な動きに左右されたり様々な側面から多くの損失や無駄が生じることがある。例えば、ランブ州のクタバル開発プロジェクトは、政治的指導者の交代によって影響を受けた。前プロジェクトにおいて建設した病院や役所、交通機関などの公共施設は、次の指導者によって継続されることなく放棄される。もちろん、このような状況は日本ではほとんど見られないことだろう。長期的な計画を立てることができ、そしてそれを着実に実行する日本の建築業界と行政にはある種の尊敬の念を抱いている。

このような状況の違いを目の当たりにして、ようやく私はインドネシアと他国の都市計画における長期的な発展性の違いを明白に感じる事ができた。私が得た経験を母国の若い世代に伝え、教育の観点からインドネシア発展のために尽力したいと思う。

北九州市の建築と発見

私はこれまで北九州の現代建築を20作品以上見てきたが、その中でも指折りの作品がある。門司港レトロハイマート、北九州市立八幡西図書館、リバーウォーク北九州の3つを紹介したいと思う。

一つ目は門司港レトロハイマート(展望室)である。1999年、門司港に竣工した高層建築であり、集合住宅と展望室の最上階に機能を持っている町のランドマークタワーである。日本を代表する建築家である黒川紀章の設計で、高さ103mの建物からは、門司港レトロ地区だけでなく、関門橋や下関の海岸線まで見渡すことができる。私にとって、高いところから人や建物、都市の風景を覗くという体験は、人が都市というスケールに比べて非常に小さい単位であるということを実感させてくれるものであった。

二つ目は北九州市立八幡西図書館である。北九州市の公共図書館は、そのどれもが非常に魅力的な施設として計画されている。私は4歳になる娘を連れて週末はよく図書館へと出かける。来館者の利便性を考えた整然と

した空間や周囲の景観との一体的なランドスケープの計画、多世代や障害のあるなしに左右されないやさしいデザインは他人の気持ちをおもひかかせる日本人の精神からきているだろう。春の季節の一番の楽しみは、図書館の外でピクニックをしながら、自然の雰囲気にもまれて本を読むことである。子どもを持つ私にとって、この建築作品は本を探す場所としてだけでなく、子どもと学びそして遊ぶ、家族のレクリエーションの場にもなっている。これは一度目の来日の際には気が付かなかった日本の公共施設の魅力である。

三つ目はリバーウォーク北九州である。この建築は、小倉北区、正確には小倉城に直結する歴史的なエリアに位置しており、ジョン・ジェルデとマイケル・グレイブスが設計した複合商業施設で、伝統と現代の建築様式の融合をテーマに掲げ、劇場、レストラン、NHKスタジオ、オフィス、北九州市立美術館の分館や店舗といった施設が入っている。施設だけではなく、昼も夜も様々なイベントが屋外でも行われていて街の賑わいを創り出している。かつて鉄鋼業が盛んで工業地帯と

して栄えていた北九州地域では観光や環境技術産業にも力を入れており、これまで注目されてこなかった自然や文化的な魅力を発信している。

北九州という都市も日々更新していて、メインであった工業都市から文化・観光都市へと少しずつ変化してきている。それは北九州で暮らす人々に合った施設が提案され、あるタイミングをきっかけに交通やインフラが長期的なスパンでアップデートされるように取り組んでいるからである。時代と共に少しずつ変化する北九州のアイデンティティには常に高い技術力と他人を思いやる奥ゆかしいところがデザインのベースに存在しているからだと思う。

数カ月後私は帰国する予定である。帰国後はバンドル・ランブ大学建築学科の講師としてまた再スタートを切る。二度の留学に渡り日本から学んできたことは数えきれない。この貴重な経験を若い世代に伝え母国の都市の発展に貢献していきたいと思う。

(翻訳：北九州市立大学大学院環境工学研究科博士後期課程 森 友里歌)



門司港レトロハイマート



門司港レトロハイマートからの眺め



北九州市立八幡西図書館そばのランドスケープ



小倉北区紫川沿いの眺め